

環境にあそぶ

ディスクのためのShell風

XDIR for X68K
Version 3.5

■武石秀男

98版『XDIR』も、バグ・フィックス、EMSメモリ対応・書庫機能追加とバージョン・アップされ、“Ver 4.2”となりました。“Ver 4.3”は、ファイル書庫管理にLHARCの高速・高圧縮アセンブラ・ルーチンを埋め込んでいるためにフリーソフトではなく、もっぱら個人で使っています。また、新しい職場では富士通一色で、XDIRも、富士通のFMR-50に移植され、先生方や多くの生徒たちに利用されています。

今回は、X68000版『XDIR Ver 3.5』を紹介します。バージョンが少しダウンしているのは、マルチメディア検索機能と簡易エディタをカットしたからです。必要なときは98版XDIRを使うことにしています。98を持っているというこちらの勝手からですが、98に限らず、LKIT-16、L3、S1、X1、FM7など、手狭なアパート暮らしの中で、罵声を浴びながらも、これら“青春の1ページ達”を大事に持ち続けています。

68版の特徴

マルチメディア検索機能と簡易エディタ機能をカットした移植版Ver3.5は、以下の特徴をもっています。

- ①マルチ・ウィンドウ形式で最大10個のドライブが同時に表示でき、ファイルのコピーなどはウィンドウ間で行なえる。
- ②メニュー形式でコマンドが実行でき、ポップアップ・メニュー、プルダウン・メニューでコマンド・キーが分からなくても操作できる。
- ③マウスによるメニュー操作で、コマンド実行が手軽にできる。
- ④マクロ機能を使い、自分に合った環境が容易に作れる。表示色はバックグラウンドまたはウィンドウごとに自由に設定できる。
- ⑤書庫機能で、サブディレクトリを含むファイル群が圧縮格納できる。
- ⑥テキスト・メモリの特長(=98のGVRAM+α)を

活かしたアニメーション。

⑦65,536色中16色の画面表示。

プログラムの移植で、とくに問題な点はなかったのですが、テキスト表示の遅さが気になり、高速化のために多くの時間を費やしました。これまで、アニメーション・ツール『Moving』はアセンブラ、『XDIR』はC、という路線を守ってきたのですが、今回は、テキストで16色を表示するために、テキスト表示ルーチンをアセンブラで作成し、Cソースの中にインライン・アセンブラの形で挿入しました。

ビットマップのせい、力不足(CPUか私か?)のせい、"トロトロ表示"になってしまっ、なかなか思うような高速表示ができません。試行錯誤・悪戦苦闘の末、だいふ高速化されたのですが、まだまだ不満がいっぱいで、これも、今後のバージョン・アップの中で解決していきたいと思っています。

なお、環境補助ツールとして『テキスト Moving』を組み込んでいますが、これはアニメーションのためのツールとして開発したものです。グラフィック画面用の『グラフィック Moving』との2つのタイプが用意してあり、'88年10月号で紹介した98版 Movingと同様、デバイス・ドライバとして組み込み、ソフトウェア割り込み(98はINT40、68版はTRAP0)で使っていたものを、Cのライブラリとして手軽に利用できるように、手直したものです。

Movingは全Cソース版もできあがっているのですが、またの機会に、アプリケーション・プログラムの説明を織り込んで紹介したいと思っています。

それにしても、XC Ver2.0のコンパイルの遅さには閉口します。前のバージョンの方がまだしものようです。コンパイル環境にも問題があるのでしょうか、98版TURBO Cの、ゆうに20倍はかかってしまいます。XDIRの全コンパイルに1時間以上もかかるのですから、TURBO Cで、BASIC的“考える前にまず実行”の癖がついてしまった私にとっては、この待つ時間が

たまらなく無駄に思えてしかたがありません。

でも、考え方によっては、XCは慢性的睡眠不足になりがちな我々に居眠りの時間を提供してくれるすばらしいコンパイラなのかもしれません。ということで、これからがいよいよ、XCの季節!

98版との比較

ビット・マップによるテキスト画面のために表示が全体的にトロくなっています。かなりの時間をつき込んだ結果、高速化に成功したのですが、テキスト画面への65,536色中16色表示・アニメーション機能など追加したために、また、とろい表示に戻ってしまいました。

豊富な表示メモリを活用しての画面切り替え方式などを取り入れ、何とか満足できるものに仕上がったのではないかと考えています。マウスを使つてのマルチ・ウィンドウ移動・拡大・縮小、そして、「Moving」アニメーションは、けっこう楽しめます。

書庫機能によるファイル群アーカイブ圧縮格納データはワード・ロングワード値のメモリの上位下位を反転して格納するので、書庫ファイルは98版との完全互換になっています。

●削除した機能

① **GRAPH** + **T** コマンド

マルチメディア(MS-DOS以外の2HD, 2DDディスク) 検索機能

② **E** コマンド

テキスト・ファイルの簡易エディット(ディスクのイジェクトに変更)

●追加した機能

① **OPT.2** + **B** コマンド

PCMファイルのビーブ音出力

② **OPT.2** + **O** コマンド

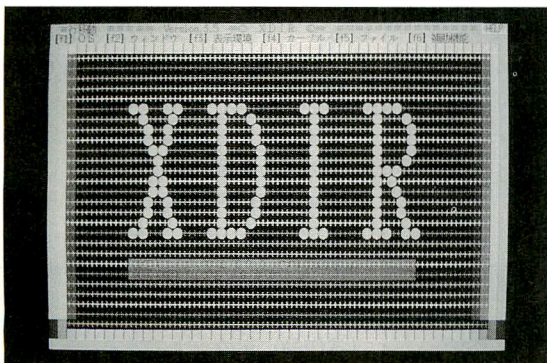
OPMファイルの演奏出力

③ **OPT.2** + **M** コマンド

Movingファイルのアニメーション

④ **OPT.1** + **S** コマンド

X68K版



ファイル・ディレクトリの格納イメージの表示とディレクトリの並び換え

指定したディレクトリのファイル並びが表示されたイメージでディスクに格納される

⑤コマンド・ライン **"/O** ファイル名"

Movingファイルの環境アニメーション(ウィンドウの下部でウォーキング)

キータッチが鈍く感じる場合などは**"/O-**でキャンセルできる

⑥コマンド・ライン **"/B** ファイル名"

指定したファイルをビーブ音データとして設定する

⑦コマンド・ライン **"/V** パタン番号, 横ピッチ, 縦ピッチ"

アニメーション・パターンの速さを変更する

⑧コマンド・ライン **"/Xn1,n2,n3,n4"**

起動時のメイン・ウィンドウの設定

n1	ウィンドウの左端(MW_LFT)デフォルト	0
n2	上端(MW_TOP)	0
n3	横幅(MW_WID)	96
n4	縦幅(MW_LIN)	32

[例] **/X0,0,80,25** **/X,,40,16**

/X20,20,32,6 **/X,,40**

TURBO C(=TC)からXCへ

①関数宣言および関数プロトタイプ

XC(Ver1.5)は旧タイプで引数の部分に型宣言を記述するとエラーになります。

CTYP_N20.XはTCの関数宣言の新タイプのソースを旧タイプに変換します。XC新バージョン版では、型宣言が可能となっているようで新バージョンXCを持っている方には不要なツールかもしれません。

新タイプ→旧タイプ

CTYP_N20 <変換元ファイル名> <変換先ファイル名>

旧タイプ→新タイプ

CTYP_O2N <変換元ファイル名> <変換先ファイル名>

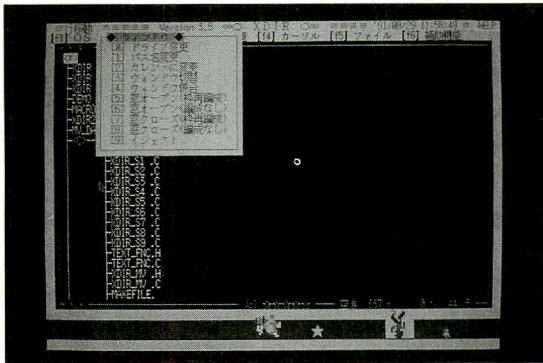
②テキスト・ウィンドウ関数

TCは関数windowで完全な矩形ウィンドウの設定ができます。これに対して、XCは関数**B_CONSOLE**で矩形ウィンドウが設定できますが、画面スクロールのときウィンドウの外までスクロールしてしまいます。

応つなっていますが、このFDDがなぜか3.5インチでもなければ5インチでもなく、8インチ(笑)なんです。そんな訳で、メディア変換に5→8→3.5という、なんとも七面倒な手順を経なければならぬのでした。まさかこの時代になって8インチを使う羽目になろうとは思っていませんでした。



ウィンドウ



XCのバグなのか、手抜き(スクロール高速化のためラスタ・コピーを使用?)か分かりません。

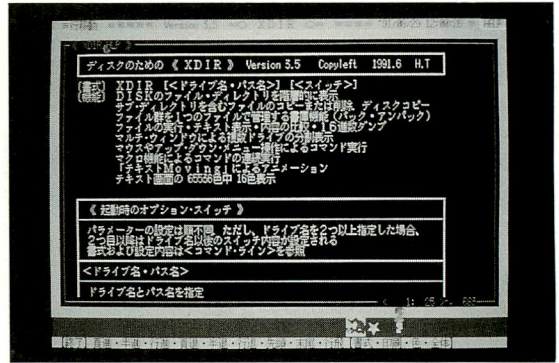
XC新バージョンは"IOCS機能"の拡張により、この点が改良されていますが、TCのような高速性はありません。拡張性豊かなビット・マップの宿命でしょうが、これも、やがて、CPUの高速化で解決されると思います。

リストTEXT_FNC.Cの中の関数txscrollは矩形内スクロールを実現します。

このほか、TEXT_FNC.Cの中には、TCマニアがXCでTurbo Cライクにプログラムするための関数群が用意されています。詳しくはソース・リスト、サンプル・プログラムを参照してください。

このほか、TEXT_FNC.CにはTURBO Cライクな

タイプ表示



関数があります。詳しくはTEXT_FNC.DOCを参照してください。

*

『XDIR』はMS-DOSコマンドDIRの不満点を少しでも解消させようとして始めた軽い環境ソフトでしたが、200Kバイトに及ぶ重いプログラムになってしまいました。不満な点がいくつか残されていますが、今後のバージョン・アップの中で解決していきたいと思います。

まずは、デモ(DEMO.BAT)を見て、そして、"XDIR環境"の中で思いきり遊んでください。

プログラムは添付ディスクに収録

実行に必要なファイル

CONFIG.SYS	Humanのコンフィギュレーション・ファイル。XDIRを動作させるための環境を設定する。 コマンドによっては頻りにディスクをアクセスする場合がありますので、ファイル・バッファの値を多めに確保しておく と再読み込みにディスクをアクセスしないですむ。 例 BUFFERS = 30 FILES = 20	XDIR2.HLP	XDIRの簡易ヘルプ・ファイル。なれたら「XDIR.HLP」と交換して使う。
AUTOEXEC.BAT	Humanの自動実行バッチ・ファイル。 XDIRを動作させるための環境を設定する	DEMO.BAT	機能評価用マクロ実行バッチファイル
XDIR.X	XDIR本体	MACRO.DAT	DEMO.BATで読み込むマクロ・ファイル例
XDIR.HLP	XDIRのヘルプ・ファイル。 絶対にユーザーが変更してはならない。パスで指定したディレクトリ上に置いておく。	XDIR.ENV	起動時に読み込む環境ファイル。 自分なりのXDIR環境をつくるためのファイル。
		MV_DATA	環境アニメーションのためのMovingデータ例。起動時のオプション"/OMV DATA"で読み込まれる。 アニメーションを組み込んだとき、キャラクタの変身(隠れたところでデータ変換)中はキー反応が悪い場合があるが、XDIR.ENVファイル中の"/OMV_DATA"を外すか、起動後のオプション"/O-"でアニメーション (試作品)をカットできる。

それから、私はDBSAVEが成功したことがタダの一度もありません。なぜか"Can't create dist file"と表示されて処理が停まってしまうんです。仕方なくFILECONVを使ってBASICファイルを変換していますが、一体どうしてなのでしょう？

V30よりは386SX、でも自宅では初代88の(超思考マン)

開発用ファイル (XC Ver 2.0で作成)

XDIR 本体	
XDIR.H	C 言語ソースでインクルードするヘッダーファイル
XDIR.S1.C	ファイル (分割 1)
XDIR.S2.C	(分割 2)
XDIR.S3.C	(分割 3)
XDIR.S4.C	(分割 4)
XDIR.S5.C	(分割 5)
XDIR.S6.C	(分割 6)
XDIR.S7.C	(分割 7)
XDIR.S8.C	(分割 8)
XDIR.S9.C	(分割 9)
MAKEFILE	分割コンパイルのメイク・ファイル

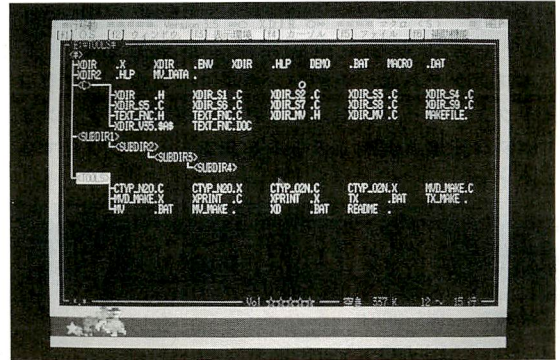
Turbo C ライクな関数. 65,536色中16表示.

TEXT_FNC.H	テキスト・ウインドウ関数ヘッダ・ファイル
TEXT_FNC.C	テキスト・ウインドウ関数Cソース

テキスト・アニメーション

XDIR_MV.H	Moving 関数ヘッダ・ファイル
XDIR_MV.C	Moving 関数Cソース

ディスク構成

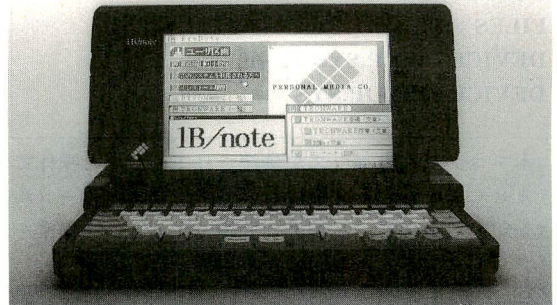


New Product BTRON仕様パソコン

「パーソナルメディア」は、BTRON仕様のパソコン『1B/note』を一般ユーザー向けに発売開始する。一般ユーザー向けにBTRONパソコンが発売されるのはこれが初めて。

《特徴》

- 「BTRON1」仕様に準拠したOS「1B」搭載
「1B」は、BTRONのうちでパソコン・レベルでの比較的小規模なハードウェアに実装するためのOS。80286、または80386上で動作。
- 文章エディタ・図形エディタ付属
文字修飾、書式指定や図形の混在が可能な「文章エディタ」と、セグメントを扱える「図形エディタ」が付属。DTPとして使用可能。
- 通信機能内蔵
モデムと通信ソフトが付属され、パソコン通信が可能。「パーソナルメディア」では、この機能を利用してユーザーサポートを行なう予定。
- 製品仕様
CPUに386SX (16MHz) を搭載。メイン・メモリ4



Mバイト、ハードディスク20Mバイトを内蔵。3.5インチFDD搭載

《価格》

システム価格	¥485,000
9月末までの価格	¥398,000
11月末までの価格	¥450,000

《問い合わせ先》 パーソナルメディア (株)

〒142 東京都品川区平塚1-7-7 MYビル
☎(03)5702-0355